

アヴェロエス『「靈魂論」大註解』の根本問題

アダム・タカハシ(東洋大学)

古代から初期近代までの西欧において「哲学」は、もっぱらアリストテレスが構築した学問体系を意味していた。ただし、長い歴史のなかで、アリストテレスに由来する哲学的教説は、彼のテキストの註解者たちの解釈を経ることで、大きく変容を遂げるようになった。そのような註解者のなかでも、十二世紀スペイン・コルドバで活躍したアヴェロエス(イブン・ルシュド)が果たした役割は大きい。彼はアリストテレスの著作集を包括的に読み解くことで、時に矛盾を含むその古代の哲学者のテキストのなかに一貫した議論を見いだそうとした。後世の知識人たちは、アリストテレスのテキストをアヴェロエスの解釈とともに読み進めることで、多かれ少なかれ後者の影響下で哲学的思考を展開することになった。

アヴェロエスは、アリストテレスの著作にたいして、小・中・大の三種類の註解書を残したことで知られる。特に『靈魂論』『形而上学』『天について』など幾つかの著作にかんして書かれた「大註解」では、アリストテレスの教説が踏まえられながらも、時に元のテキストが述べるところを超えて豊かな議論が展開されている。今回の発表で取り上げるのは、その一つである『靈魂論』(*De anima*)の「大註解」である。

アヴェロエスの『「靈魂論」大註解』は、アリストテレスの元々の『靈魂論』、そしてアヴィセンナの類書、および幾つかのスコラ神学者たちによる著作とともに、十三世紀以後の西欧の靈魂論・認識論の基盤をなしてきた。だが、そのようにアヴェロエスの著作を他の哲学者・神学者たちの著作と同列に置くことに違和感を覚える者もいるだろう。というのも、広く知られるように、トマス・アクィナスなどのスコラ神学者たちは、アヴェロエスの人間靈魂に関する教説、とりわけ全人類にとって「知性」が「一つ」であると説く「知性単一説」を批判し、また同様の批判がその後の哲学的伝統でも反復されてきたように思われるからだ。その批判を通して、単にアヴェロエスの或る種の議論が誤りであるということだけではなく、彼がアリストテレスの教説をしばしば大きく歪曲してしまう不当な解釈者であったとすら考えられるようになった。

では、そのようなトマス・アクィナスたちによる批判は、そもそも妥当なものだったのだろうか？ また、アヴェロエスの靈魂論・知性論は、アリストテレスの教説を大きく歪めるものだったのだろうか？ さらに、「知性単一説」と称されるアヴェロエスの議論は、そもそもどのような人間の靈魂や知性に関する見解を示しているものなのだろうか？ このような論点について、多くの哲学者・哲学史家たちは十分に考慮することなく、トマス・アクィナスなどの批判者側に立ってアヴェロエスをこれまで安易に断罪してきたように思われる。

このような現状を受けて、本発表では特に『靈魂論』の第三巻にたいするアヴェロエスの註解を詳細に読み解くことで、アヴェロエスの議論の本来の意義を改めて問い直し、これまでの哲学史の伝統的見解についても再考を促すように試みたい。特に、本発表では、アヴェロエスが「知性単一説」と称される教説によって、彼がどのような人間の靈魂・知性像を考えていたのかを論じることにする。

発表では、下記のような内容の議論になるだろう。アヴェロエスの解釈を詳細に検討すると、一般に「知性単一説」と称される見解は、単にアリストテレスの議論に見られる幾つかの原則を単にまとめたものに過ぎないことがわかる。つまり、アヴェロエスにと

って「知性単一説」とは、解釈の果てに見出される「結論」のようなものではなく、議論の端緒において示されるような「原則」に過ぎなかったのだ。また、一般に「知性単一説」の立場をとった場合、認識主体の個性の問題が理論的に説明できないといった論点(すなわち、もし知性が全人類において一つなら、私が或る事物を認識するとき、私以外の貴方、あるいは他の第三者も同じようにその事物を認識することになるのではないかと、いった問題)も、実はアヴェロエス自身が検討し、知性の単一性と矛盾しない形で彼自身の見解を述べているのである。彼によれば、認識の個性を生むのは、知性の個性ではなく、身体的能力を通して受容される「表象的概念」(*intentio*)の多数性であった。

このようなアヴェロエスの『「靈魂論」大註解』の精密な読解を行うことによって、「知性単一説」と呼ばれてきた教説の本性だけでなく、アリストテレスの議論と中世以後の靈魂論・認識論との連続性・非連続性にかんしても、より正確な理解を持つことができるだろう。